

市民参加実施記録

案件	第七次伊達市総合計画策定に係る住民説明会 (三ツ和・市街第一・市街北星・山下)
市民参加の方法	説明会
実施日時 及び場所等	・平成30年7月30日（月）18時30分～20時30分 ・市民活動センター多目的室
所管部課名	企画財政部企画課
<p>【概要】</p> <p><出席者></p> <p>市：市長、副市長、教育長、総務部長、健康福祉部長、経済環境部長、企画財政部参与、建設部長、建設部参与、教育部長、教育部参与、議会事務局長、企画財政部長、企画課長、財政課長</p> <p>住民：24名</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開会 2. 市長挨拶 3. 総合計画概要説明 4. 意見交換 <p>【住民】</p> <p>企業誘致は、これからの伊達市の財政のために必要だと思う。北海道の寒い気候を活用した企業の工夫として、ある企業は石狩にデータセンターをつくり、地下に雪をためて、夏場はその雪の寒さでデータサーバーを冷やして電気代を節約していると聞いた。伊達市も北海道の気候と土地の広さを生かした企業誘致を進められないのか。また、雪をため込んで、クリーンなエネルギーを使っているということ売りにできないのか。</p> <p>また、市役所がとても暑いと感じる。クーラーを付けられないのか。人が仕事をする中で一番効率的な温度は25度らしい。それから5度上がったたり下がったりすると2～3割効率が落ちると聞いた。それは、人件費を2～3割無駄にしているということでもあるので、市役所にもクーラーをつけてあげてほしいと思う。</p> <p>伊達市内にはソーラーパネルが無秩序に並んでおり、災害が起きたときに地滑りなどで壊れ、非常に危険な状況になる。本州では、山を削ってソーラーパネルをたくさん建て、そこで地滑りが起きて人が死ぬということも起きている。また、無秩序に並んだソーラーパネルは景観を損ねる。10年後のまちの姿を想像すると、景観を壊して、ソーラーパネルをたくさん建てるのはいかななものかと思う。斜面が何度以上のものには建てられない、といった規制や条例を伊達市でつけれないものか。</p> <p>【市長】</p> <p>企業誘致について、私が市長になってからの20年で、まだ1社も誘致できていない。今、実際に話が進んでいる企業は幾つかあり、そのうち一社が確認申請を出す前のレベルまで来ている。</p> <p>村上農園という会社がある。ブロッコリースプラウトや豆苗などを扱う、新芽野菜の会社である。たまたま、6年ぐらい前にまちづくりをするためのキーワードとして、健康、野菜などを考えネットで検索していたら、ブロッコリースプラウトが出てきた。これは、ブロッコリーの新芽野菜で、特許があり、それを村上農園がアメリカから買って国内で栽培・販売している。村上農園の本社は広島にあり、企業訪問をした。それが実を結び、現在確認申請をしており、</p>	

申請がおりれば伊達市で水耕栽培が始まる。

村上農園は、昔、カイワレのO-157事件ですごく苦い思いをしたところなので、今は特に菌に対して徹底した安全管理をしている。山梨県の北杜市というところにも工場があり、視察もしてきた。

あと五つぐらい、伊達市に企業進出したいということで交渉している企業がいる。まだ決定ではないが、来年あたりに皆さんに協力していただきたいと考えているのは、サントリーワインという会社である。サントリーワインが伊達市に技術支援をするという協定を結び、来年、2,000本のブドウの苗木を植える。そのときに、できれば今日来ている皆さんを含めて、市民参加でワインづくりをやってみたいと考えている。

行く行くはサントリーワイン本体を誘致できればいいが、それは実際に生産してみて、おそらく2023年～2024年頃に本当にワインができるかどうかという結果が出ていると思うので、慎重に判断していきたい。成功すれば本当に大きなインパクトがあるので、ぜひ皆さんでワインづくりのもととなるブドウの苗木を植えて、収穫になると人手が必要になるので、皆さんの力を借りながらサントリーワインを引っ張っていききたい。

また、市役所の暑さについて、北海道の夏は短いので、少し我慢し、扇風機ぐらいは利用してもいいと思う。クーラーを入れると相当お金がかかってしまうので、厳しいと思う。

ソーラーパネルは、東日本大震災があったときに、当時の政権が固定買い取り価格制度をつくり、太陽光発電だとキロワットアワー42円50銭という高価格で買い取りしてしまった。これは、国でつくったルールなので、我々が逆らうことはできない。国に法律があり、北海道の条例があり、さらに市の条例があるので、あくまでも法律が最優先であり、例えばその中で条例に規定するものがあれば、我々がルールをつくることができる。

ソーラーパネルが無秩序に設置されているというのは全くおっしゃるとおりである。今は、買取価格がどんどん下がってきており、国際的には3円ぐらいである。

ソーラーパネルについては、市の政策ではないのでなんとも言えない。

【住民】

農業に力を入れているというのはわかる。いろいろな企業誘致は、財政のことを考えても非常に良いことだと思う。私は、職業柄いろいろなお客様と接しており、農家の方とのお付き合いもある。農家の方が非常に悩まれているのは、後継者問題である。聞いたところによると、後継者がいない農家が100軒以上あるということで、対策はすでに考えていると思うが、それが実を結んでいないという現実を考えたときに、今後、この素案に基づく子どもを産み育てようとする前の段階のことをもう少し考えていかないと何もできないのではないかと思う。農業の後継者問題に関して、何か考えはあるのか。

【市長】

伊達市の農地面積は、三千数百ヘクタールくらいある。全国各地で耕作放棄地と言う、農業がされない農地がどんどん増えてきている。伊達市では、長和地区と関内地区で1,800ヘクタールぐらい面積があり、ここで国の直轄事業である農地再編をしたいと考えている。

伊達市は、明治の早期から開かれた土地が多く、だんだん時代を経るに従って、田んぼの畑や、その圃場一つ一つが小さくなっていった。例えば、Aさんが8ヘクタールやっているけれども、まとまって8ヘクタールを一農家がやっているというところはほとんどなく、分割しているところが多い。これを農地再編と言い、皆さんの協力をいただき、農地を再編していくと、いわゆる生産性が上がる。生産性が上がることによって収益が上がるのではないかと考えている。

後継者問題は確かにある。農家の平均年齢は、大体66歳から67歳と言われている。今まで農地は財産であった。ところが、誰も買い手がいなければ財産は財産でなくなる。

かつて、駅前の土地は商業地で一番高かった。しかし、時代の変化とともに商業地も変化した。同じように、伊達の農地は全道でも相当高く、財産である。ところが、農家の後継ぎがいなく、草が生えるような農地になってしまうと、財産でなくなってしまう、そうした危機管理が必要である。

長和・関内地区での農地再編について、実は、最初はそれほど集まらないのではないかと思っていたが、思いのほか賛同をいただき、現在、長和、関内に住んでいる人の95%は賛同していただいている。ただし、不在地主あるいは相続されていない農地が結構あり、ここが担当としては最後の戦いになると考えている。

新規就農の方に入っていただくという取組も進めている。「稼ぐ力」という表現を使ったのは、本音を言うと農業を中心に考えている。伊達市に道の駅ができた平成23年に、農業所得ではなく、どのくらい税収が増えたか調べてみた。平成23年から28年の5年間で、所得はそれほど伸びていないが、税収は約8割増えている。

大事なのは、質の高い生産性のある農業である。雇用が減り、人も足りないので、質の高い仕事をするのが重要である。

パートも最低賃金制があるので、生産性を向上させて、できれば単価が1,500円ぐらいになるよう取り組んでいきたい。例えば、時給810円で計算すると、2,000時間働いて160万円である。「稼ぐ力」を付けるためには、それぞれの企業なり事業者が儲かるような地域にならなければいけないのではないかと思う。それは、行政だけでは無理なので、稼げるような仕組みづくりが重要になってくる。

いろいろな国の制度を活用して、市がプラスアルファで取り組んでいるため新規就農者は増えているが、もっと増やさなければ間に合わない。今の仕組みではなかなか増えないのが現状である。その理由は、農業は最初に相当な投資をしなければならぬからである。例えば、畑作農家に新規就農しようと思えば、四、五千万円はかかる。酪農はもっとかかると言われている。これを全く経験のない人が研修を経てやるとなったにせよ、数千万円をかけてやって失敗したらどうするのかとなり、やはり最後に二の足を踏む原因になっている。そのため、我々がここのハードルをいかに下げることが重要であり、今後取り組んでいきたいと考えている。

【住民】

まちの「整理整頓」に非常に興味を持っている。市内には古い建物や空き家がいろいろとあり、まち全体の整理を考えて、市役所の人たちは言いにくいだろうと思うが、行政区域の縮小を考えるのが、これから伊達市が存続していくのに一番手っ取り早い方法ではないか。また、戦力を集中することによって戦えることもある。

まちの整理整頓はどのような手法でやろうと考えているのか、お聞きしたい。

【市長】

非常に難しい問題である。三十数年前から子どもの数が減ってきて、毎年、PTAで繰り返し議論していたのは、会費が減る、事業をやめようという話だった。例えば、人口10万人というまちが5万人になったら半分になる。そのときに、人口10万人のまちにするのか、5万人のまちにするのか、人間というのはなかなか捨て切れない。かつて10万人もいたという思いがあるから、5万人というまちにするになかなか踏み出せない。

私は、民間企業にもいたが、10億円あった売り上げがどんどん減ってきて5億円になったとしたら、8億円ぐらいのときに、5億円になったときにやれる経営を目指すというのが正しいと思う。

同じように、この総合計画では、人口は推計で、何かを目標にした数字ではない。国の研究所の推計人口によるものである。しかし、我々はこの推計人口に負けたくないため、負けられないような政策運営をやっていく。

人口が減ることを前提として、人口が減った形でのまちづくりをやっていく。ただ、実際は人口を減らしたくないので、どうやったら人口を増やすことができるかを常に考えながらやっていく。

大滝は川の字であり、札幌に向かう国道453号線が左側にあり、真ん中に長流川があり、反対側に昔栄えたミニ集落が幾つかある。そうすると、例えば、除雪一つとっても、行政サービスなので一軒一軒全てやるが、本当にこのやり方が正しいのかという疑問がある。

やはり、人口が減ってきたら、除雪やごみ収集などは典型的な例であり、もし一か所にみんなが寄り添って暮らせば、除雪費やごみ収集コストはどんどん減らすことができる。

例えば、学校統合についても、ノスタルジックに考えたら統合しないほうが良く、我々も反対運動は起きないので統合を目指さないほうが楽である。しかし、それは本当に良いことなのかということタブーなしで議論していかなければいけないと思う。

したがって、まちの整理整頓を強権的にやるつもりはない。きちんとした手続、手順でやらなければいけない。法律にのっとればどこに住んでも構わないが、行政サービスの範囲をある程度整理する必要があるのではないかと考えている。どのサービスをどう整理するかは、これから皆さんと議論しながら考えていきたい。

また、ごみ収集の回数を変えずにいくのかどうかも議論しなければいけない。こうした細かい見直しを積み重ねていくことが、これからのまちづくりでは重要になると思う。切るものは切る、やるべきことはやるというメリハリが重要ではないかと思う。

これまでは、なかなか本音の議論ができず、問題を先送りしてしまってきた歴史があるので、私はそれにチャレンジしていかなければいけないと思っている。

【住民】

伊達市が発展してきたのは、農業、漁業という第1次産業によるのではないかと考えている。

私が子どものころは有珠の海水浴場も相当な人でにぎわっていたが、今はほとんど客がない。有珠のメロン街道も、当時は十四、五軒の直売所があったが、今は4軒ぐらいに減ってきている。その残念な光景は無残と言うほかない。

この伊達市の現状から、農業や漁業などの第1次産業に力を入れなければ、まだまだ衰退していくのではないかと思う。後継者、担い手、人手不足という支障がある。そのため、機械化、近代化は避けて通れないと思う。実際に人手不足を解消するためには、資金がかかる。市の補助制度がもう少しないと、農家はやっていけないと思う。第1次産業の行く末を考えて、もう少し力を入れていただきたいと思う。

【市長】

北海道で言うと、札幌周辺を除いて、ほとんどの地域が衰退している。一番良い例が稚内市である。私は、昭和62年か63年に議会で稚内に視察に行ったことがあるが、その当時、人口が5万人を切ると大騒ぎしていた。今は伊達市の人口とほぼ変わらない。なぜ人口が減ったのかというと、働く場所がないからである。働く場所というのは、1次産業である。中国もそうだが、どの国も産業構造の転換によって人口が増減する。工場が来れば、当然人口が増えるが、1次産業が中心であると絶対に人口が減る。ポイントは、1次産業に関連する2次産業と一緒にやることである。さらに、それに合わせた3次産業も重要である。特に観光に力を入れなければいけない。1次産業だけでは、人口を維持する力にはならないので、2次産業や3次産業に力を入れていかなければいけない。

6次化はどの地域も言っているが、実際にほとんどの地域でできていない。

「茅乃舎（かやのや）」という福岡のだしの会社がある。本州と北海道の違いは、本州は加工に優れていることである。私が議員になった35年前も、北海道は、素材は良いが加工がだめだと言われていた。

2～3年前に、北海道経済連合会から頼まれて富山に行ったことがある。理由は、薬草を北海道に持っていきたい、行く行くは薬品工場を北海道に誘致したいという経済界の強い思いがあったからである。

富山に行って製薬会社をいろいろ回ると、一つの企業に周辺産業があることで、企業、産業が成り立つことがわかった。工場が一つだけあるという状況は、今はないそうだ。例えば、葉なので袋を製造する会社など、周辺産業があって初めてできるということだった。我々も知恵を使い、村上農園の可能性と、その効果によるさらなる企業誘致を考えていきたい。

先日、苫小牧東部にあるトマトの工場を見に行ってもわかったのが、伊達のポテンシャルは私が考えているより高いということである。それは、最低気温と最高気温の差である。例えば、旭川は、最低気温はマイナス30度までいき、今日は三十何度までいっている。伊達は、最低気温がせいぜいマイナス10度ぐらいで、最高気温もめったに30度までいかない。この差は、植物工場をやる場合のエネルギー、燃料の差につながってくる。そのため、ぜひ村上農園を引っ張

ってきて、これをテコにして2次産業、いわゆる加工関係を引っ張ってきたいと思っている。

産業の発展については、民間の力、特に若い人にチャレンジしていただきたい。そうした民間の力と、行政が協力することで地域が成り立っていくのではないかと思う。ぜひ、そういう話があったらいろいろと教えていただきたい。

最近になって心配なのは、商業の販売額が落ちてきていることである。ネット通販によって、実際の店舗が厳しくなっており、この状況が田舎を虫食っている。実は、都会だけでなく田舎も通販にやられている。この通販に何とか対抗する方法がないと、店舗として成り立たなくなる。ある程度の売り上げが上がらなければ店は成り立たないので、非常に心配である。

【住民】

すでに他の地区の説明会でも何回か発言してきたが、富良野は自ら事業を起こしており、それを伊達でもできないかと思っている。観光会の人と一大観光開発をやれないかという話をしている。

【市長】

富良野の歴史について、倉本聰の「北の国から」は、実はプリンスホテル、西武が関わっている。堤義明さんが富良野にホテルをつくり、スキー場をつくり、ワールドカップも呼んでいる。当時、富良野はへそ踊りぐらいしか知られていないまちだったが、いかにして富良野を有名にするかということで、堤さんがバックアップして倉本さんを富良野に連れて行ったそうだ。

私は、太陽の園からの斜面はすごく売れるのではないかと思い、期待している。太陽の園に上がっていく道路があり、その道路から東関内に抜ける道道を整備している。この整備ができれば、一番のビューポイントになると思う。

まちを売るためにはスターがいなければいけない。スターというのは、必ずしも人という意味ではなく、物もある。例えば、夕張には夕張メロンというスターがいる。私は、伊達に何かスターが欲しいと思い続けており、亙理から引っ張ってきたイチゴもスターになれるかと思ったが、なかなか難しい。

しかし、移住も相当期待できると思う。問題は、土地がないということである。家はどこにでも建てられるわけではないため、外から来る人が望むような場所に家が建てられない、ということも課題である。

【住民】

富良野市は、市が自ら事業を起こしてラベンダー畑をつくったのか。

【市長】

富良野市ではなく、上富良野町や美瑛町だったと思う。

無いものを言うのではなく、我々の地域に合ったもの、我々の地域にあるものの中で、光るものを探すのが重要だと認識している。

【住民】

企業誘致というのは、どこかで切り口を出さないと企業が来ない場合があるので、切り口になるところを市が多少の事業費をかけても、投資していただきたい。

【住民】

総合計画P5「市民幸福度はどうやって測るの？」という部分で、「将来も伊達市に住み続けたいと思う人の割合」は77.1%となっている。これは非常に高いと思うが、実際にこうなっているのか気になる。どのようにしてこれを測ったのか。

次に、だんだん高齢化していくので、伊達市の高齢者人口が増えるのは当たり前だと思う。

では、市民幸福度を測るためのモノサシを、「将来も伊達市に住み続けたいと思う人の割合」とするならば、高齢者だけでなく本当に幅広い世代の人がこれから住み続けたいと思うようなモノサシにしていかなければならないと感じる。

次の「健康維持に関する取組の満足度」も、当然向上するべきだと思うが、病院に関する課題もあると思う。この2つのモノサシについて、市の考えを教えてください。

【企画財政部長】

「将来も伊達市に住み続けたいと思う人の割合」のモノサシは、この計画の策定にあたり市民アンケートをとり、その中にあった項目で、アンケート結果が77.1%であった。

「健康維持に関する取組の満足度」も、市民アンケートに同じような項目があり、その結果となっている。

【市長】

高齢者に、「私は伊達市に住めない」と言われることがよくある。理由は、医療の問題である。日赤の問題も、何で市が補助金を出すのだと言われるが、常勤医を25人抱えるというのは本当に大変なことである。

今、市長会の会合が年に2回あり、空知管内は全市が市立病院を持っているが、ほとんどの病院が問題を抱えていて、これまでにどれほど借金をして職員の給与カットをしたかわからない。その状況を見ると、伊達市に市立病院がなかったというのは本当に幸いだったと思う。

また、高齢者に「伊達は退屈だ、行くところがない」と言われることがある。

以前、八戸へ行ったとき、屋台村みたいなものがあり、夜は若い人がたくさんいた。小さい店がいっぱいあり、1回飲みに行くと1,000円から1,500円ぐらいで、少し食べて、少し飲んで、あちこち回ることができる。そういう楽しさが受けているということだった。その光景を目の当たりにして、伊達は高齢者に退屈なまちだとよく言われるので、本当につらい思いをした。行ってわくわくするようなまちを目指していきたい。

【住民】

行ってわくわくするという意味では、文化のあるまちが必要であると感じている。

【住民】

子育て世代からの意見として、伊達には大学がないので、子どもは高校を卒業後に市外に出ていくと思うが、この子どもたちが戻ってこられるまちづくりを望んでいる。そのためには、やはり企業が重要だと思う。農家など1次産業は収入が安定しないので、若い子はそこで働きたいとなかなか思わないだろう。今の若い子は、サラリーマンや安定した企業を望んでいるので、村上農園のようにオートメーション化されて、デパートなどに野菜を安定的に卸して、月に何万円のボーナスをもらえるという企業が伊達にできると、大学などで研究した子どもたちが戻ってくると思う。

伊達の教育に関しては、今、教育委員会でいろいろな体験学習などをやっていただいているので、子どもたちはすごく満足して、伊達のまちを好きになっていると思う。今後も継続していただきたい。

また、子育て世帯として、安心して暮らせるまちづくりという点では、災害対策も重要だと思う。ここ最近も水害があり、大雨になると川が氾濫するのではないかという不安がある。実際、西小の橋が壊れてしまったのを子どもたちが目の当たりにしていて、恐怖感を持っていると思う。そうした災害のシミュレーションなど、市がどこまで災害対策を本気で行っているのか知りたい。広島でも豪雨災害があり、今、気象があちこちで変わっており、同じような災害がどこで起きてもおかしくない状況である。そのため、市ですぐにでも動けるような体制ができていくのか知りたい。

【総務部長】

伊達は、どちらかというと気象に恵まれているまちで、昭和50年代に洪水災害があったが、

それ以降、大きな災害は幸いにも余りなかった。

ここ数年は、2年前の暴風雨、昨年4月に風、9月に暴風雨、3月には雪ということで、今までと気象が違おうと思う。異常気象と言ってしまえばそれまでだが、そういう状態だと感じている。

市でも、そういう状況を捉え、いろいろな情報の提供や市民の方が避難までいかななくても、1人で行くのは心配だから一時的にいる場所をつくっていただきたいという声もあるので、避難に向けた動きを従来よりも早くとるようにしている。

先月も、長和地区で、まだ警報というレベルにはなっていなかったが、「不安な方はコミュニティセンターにお集まりください」というご案内をし、早目早目に対応するようにしている。

災害に関しては、いろいろな形で市民の皆さんに情報を流したいと思っている。今までは、拡声器で防災無線や広報車に外からお知らせすることがメインだったが、最近の住宅は非常に気密性が高く遮音性に優れているため、なかなか音が通らないことがある。特に天候の悪い日だと、外の音もありなかなか聞こえないということもある。そのため、防災無線等のお知らせに加えて、例えばインターネットを活用してホームページやフェイスブックで情報を提供したり、W i r a d i oで情報を流したり、また、報道機関を使って情報を小まめに流していたりというさまざまな方法で情報をお知らせするようにしている。市民の皆さんには、この方法なら情報がとれる、この情報のとり方が良いといったことを普段から考えておいていただくと、皆さんのお手元に早目に情報が届くのではないかと思いますので、ご協力いただきたい。

【住民】

今の子どもたちが将来伊達に戻ってきたら、子どもたちが親を介護してくれる時代になり、福祉関係の雇用も進むと思う。子どもたちが戻ってくるような取組を、今回の計画を通じて一歩でも前に進めていただきたい。

【住民】

市内のどこかにホテルが建つといううわさを聞いた。館山公園が好きであるため、もし館山公園に高級なホテルを建てたら、おそらく中国人が殺到すると思う。館山公園が伊達市の土地であるなら、伊達市全域を見渡せるし、良いところだと思う。

【建設部長】

規制があり、館山公園は都市公園として整備しているので、ホテルは建てられないと思う。

【住民】

市は、伊達市の議会をユーチューブで流しているが、カメラの解像度が悪過ぎて人の顔すら見えない。解像度を上げられないものか。

【議会事務局長】

議会事務局で、今年6月からユーチューブでの放送を始めたが、固定カメラで全体を撮って流しているため、解像度を上げるのは難しい。もともと経費を抑えてやるという前提でスタートしているので、画像については解像度が悪くてもご理解いただきたい。

音声については明確に伝わっていると思う。

【住民】

今のままの状態で放送したら、おそらく誰も見ないのではないか。動画サイトで投稿していると、無編集だと誰も見ない。編集して字幕をつけたり、ある程度カットしたりしないと見ないのではないか。

【住民】

私は、1人で子どもを育てているひとり親世帯で、今回の基本計画に、子どもの保育と教育と子育て支援体制の充実とあり、大変ありがたく思う。しかし、子育て支援よりも女性の雇用環境が悪く、生活の基盤を安定させるための職がない、働く場所がない、収入が安定しないという問題がある。

今回、基本計画の重点施策の取組というところで、子育て支援の満足度について、現状は29.1%となっており、10年後の目標値が45%となっている。私にとっては目標値が低いのではないかと思うが、市はどのようにお考えか。

【企画課長】

この数字の根拠は、実際に子育てに関係している年代が20代から40代と考え、この20代から40代の満足度を90%まで上げると設定したときに、全体の満足度が45%になるよう設定している。本来は、全ての世代が伊達市は子育てに優しく子育ての満足度が高いまちとなるのが理想だが、まずは実際に子育てに携わっている方の満足度を上げていくことを目標に設定した。

【住民】

私はカルチャーセンターや体育館を利用するが、駐車場が足りないと思う。体育館は、大会があると満車になる。川沿いのところにスペースがあり、そのスペースに飛び出す形で駐車している人もいますので、あのスペースに白線を引いて止められるようにしてほしい。いろいろな行事を開催するには、駐車場も大切ではないか。

【建設部長】

毎年、歴史の杜全体に対して、駐車場が少ないと言われている。去年、物産館のあたりで30台から40台分ぐらい増やしたが、大きなイベントなどがあるとまだ足りない。

川沿いのスペースについては、河川敷地で北海道が管理している土地なので、そこを駐車場として利用することはできない。何か別な方法があるか考えたい。

【住民】

伊達のまち中でも郊外でも、随分嫌なおいがある。まちの魅力アップに向けて、市外から来た人に「伊達は変なおいがある」と言われなかった方が良く思う。

【市長】

においというのは堆肥のにおいか。

【住民】

堆肥のにおいと漁業系のにおいの両方だと思う。特にまち中では西浜からのにおいがする。決まった時間にするので、知り合いの人から何のにおいなのかと聞かれるが、はっきりとはわからない。

【市長】

多分、においは三つあると思う。一つは水産系雑物と言ひ、漁港に揚げたホタテに付着しているものは、水を切ってから堆肥センターに持って行く。堆肥をつくるのに発酵熱を利用するので、水があると全然発酵せず、すごくコストがかかるので、浜で水切りをしたら、暖かい日はすごくにおいがすると苦情が来る。次に、北糖の土にもにおいがする。さらに、堆肥のにおいもある。

水産系のにおいについては、漁業関係の補助金がもらえるということで対策を検討している。堆肥センターについては、すでに市の負担が大きく、そこに水産系が追加されるともっと負担が大きくなるという悩ましい問題である。時間はかかるかもしれないが、においのない、きれいなまちにしたいと思う。

【住民】

私は、個人的に山歩きや道を歩くのが好きで、道東の中標津のほうに、ただ70キロメートル道を歩きに行くためだけに休みをとって行ったことがある。その道は、中標津は酪農しかないまちなので、農園や酪農家の方が個人的に、酪農の風景が素敵だからそこを歩くために道を整備したら海外からも人が来るのではないかというもくろみでつくったそうだ。実際、全国からも世界からも人が来ていて、私みたいに道内から来る人も含め、人がすごく集まるようになったという話を聞いた。

同様のことを伊達でもできないかと思い、最近、私も市民サークルでイベントを立ち上げた。北黄金貝塚の公園のあたりから伊達温泉まで、北黄金の丘や太陽の園から東関内に抜けるルートなど、全部で22キロメートルぐらいのコースをつくって実際に歩いてみた。歩いてみると、けっこう良い道であると感じた。

ただ、道東のほうは民間でやっており、最初は人が来ることで民宿の方などに喜ばれるが、結局、農家や1次産業の方からのクレームが増えてきたということで、行政が乗り出す話になったそうだ。

東北地方だと、みちのく潮風トレイルを環境省主催でやっているという話を聞いた。今年、中標津で環境省を担当している人と話したところ、行政主体でやると、今度は法律に縛られて、うまくはできるけれどもしごらみが多いところもあるということだった。

伊達にも、素敵な良い道があり、横に長いまちなので、全部をつないだら結構長いコースができると思う。例えば、そういったことを民間の私たちが企画して提案した場合に、いろいろとご協力いただけるのか、自然環境の活用についてどう考えているのか、お聞きしたい。

【市長】

ぜひ、協力してほしいと思う。実は、JR北海道の経営の問題があり、2年ぐらい前から私も委員になり会議に出ている。一時期は、何百人か呼んで「伊達歩き」というものをやっていた。それがしばらくは開催されず、実は去年から復活した。「伊達歩き」はJRが開催しているが、私は、JRは伊達紋別駅まで運び、そこから先は地元任せにしたいと言っている。JRも経営が厳しいので、促進策をやるのはわかるけれども、それぞれのまちが頑張り、来てくれた人をまち歩きに案内するという仕組みは面白いと思う。そのため、私はJRの社長に、JRは駅までで良いと伝えている。今年はまだ決まっているのでしようがないが、来年以降はそれぞれのまちに任せたいと言っている。

個人的にも歩くのは好きだが、景色というのは車で通ってしまうとあっという間に過ぎる。せっかくいい景色も見逃してしまうことが多いが、歩いていると不思議な光景が結構あることに気づく。私もウォーキングをするときには、音や空気を感じる。歩いていると外気温がわかるので、今日はマイナス5度ぐらいだなとか、今日は少し暖かくて15度あるなとか、そういうのが感じられてくるともっと楽しみが出てくる。

いろいろな提案もある中で、私は歩くことに大賛成である。来年伊達市も150年なので、歩くのをイベントとしてやってもいいという気がする。

【住民】

素案のP51にある関連指標と目標値に載っているまちづくり研修（ワークショップを含む）開催数で、現在の状況は5回、目標値が70回という設定になっている。私は、先日まで行われていたみらい会議に参加した。みらい会議を初めとするワークショップの経験者が、それを広げて伝えていく役割を担うべきではないかと、個人的に思っている。周囲に微力ながら思いを伝えており、活動している団体内でそれぞれの思いを形にすることができるように、仲間と一緒にディスカッションできるような工夫もしている。

まちづくりを「自分ごと」化するのは、市民ももちろんだが、素案P73の職員の意識改革という部分も関わってくると思う。職員の皆さんも、すごく一生懸命働いて市民のために動いていると思うが、自分の部署のみならず、もっと広い視野を持っていろいろな部署と連携していくことはとても大切だと思う。

まちづくり研修の開催数については、現在5回のところを70回にするわけだから、それぞれの部署でワークショップをする機会は必ずあると思う。行政と市民がどれだけ同じ目線で話し

ていけるか、という体制整備も必要だと思う。

ワークショップをやるには、ファシリテーションの能力が重要になってくると思う。現在、市の職員の中でファシリテーションができる人は何人いるのか、把握していたら教えてほしい。

【総務部長】

ファシリテーターができる職員が何人いるかというのは把握していない。ファシリテーション能力は、今回の説明会でも、いろいろなワークショップをやるうえでも、非常に重要な能力だと思っている。

職員研修では、ファシリテーション能力を身に付けられるような研修も行っている。ただ、1回、2回の研修ですぐに能力が身に付くとは言い切れないため、時間をかけながらいろいろな研修スタイルを通じて能力を上げていきたいと思っている。

【住民】

先日、市長からお話があった市民農園について聞きたい。実は、みらい会議の私のグループでも市民農園の話が出ていて、NHKのテレビシンポジウムでも市民農園について見る機会があった。

市長が思い描いている市民農園がどういう形かわからないが、私とそのテレビシンポジウムを見て共感できた点がある。その事例では、市民農園は市の中心にあり、例えば、保育所に通っている子どもたちが散歩して通るような道に農園があり、そこで自然と会話が生まれたり、まち行く人たちが足をとめて作業をする場で会話が生まれたり、農業の経験がないような、退職後に自宅ですることがなかなか見つけられない方たちが集まって市民農園をしていた。

伊達も、関内ではなくアクセスの良い中心部に市民農園を設けて、市民が交流できるような、一つのコミュニティとして育ててみたらどうかと思う。市長は、市民農園についてどのように考えているのかお聞きしたい。

【市長】

これからの超高齢化社会の中で、引きこもりの問題がある。特に、男性の引きこもりがすごく増えてきていると言われている。男性の引きこもり高齢者は、どうしたら社会に出られるだろうと考えたときに、農業がポイントになるのではないかと思った。

そこで、十何年ぐらい前に、連合自治会長会議で自治会長の皆さんに相談した。市民農園を各町内会単位でやってくれないかとお願ひし、実際に東地区でやろうとしたが、農地が借りられなかった。今は、関内で市民農園をやっているが、実はすごくお金がかかる。その理由は、トイレや休憩室をつくらなければいけないからである。余りにお金がかかるので、他の地区ではやっていなかった。

しかし、最近では、まち中にある市有地で何かできないかと調査を始めた。家から歩いて5分～10分ぐらいのところには市民農園があれば、来てくれる人が増えるのではないかと思ひ、担当が土地をチェックしているところである。

現在、農業普及所の所長だった人が退職後に市職員として働いてくれているので、その人に先生をやってもらひ、歩いて通える範囲にそうした施設を幾つかつくれないか考えている。また、冬もできるように、できればハウスのほうが良いと思っている。

そして施設ができたなら、そういう人方に苗をつくっていただきたいと考えている。そうすることで、苗をどこかに売って小金もできるのではないかと、段々ステップを上げていくことができるのではないかと考えている。施設を建てられそうな土地はあちこちにあり、民間の土地でも空き地がある。そうした土地を活用し、高齢者だけでなく子どもたちも巻き込んだ取組をしていきたい。

野菜嫌いな子どもでも、自分たちで野菜をつくと食べるようになる。子どもたちの教育にもなるので、一石三鳥、四鳥の効果があると思ひ。もし市民農園をやりたいという人がいて、市に声をかけていただければ、子どもから高齢者まで巻き込む仕組みをつくっていきたい。

【住民】

私は、幼稚園の仕事をしています。西胆振管内の中で、市が拠出する子育てに対するお金は、世帯の収入によって納付する月額教育費が違う。一例を挙げると、伊達市が一番高い階層で1万9,000円だが、この金額はこの近隣の中で一番安い金額になる。洞爺湖町が一番高い階層で1万9,500円、室蘭だと2万3,000円である。

子育て支援に対する要望は大きいものの、具体的な数字を見ると、この地域は決してほかの地域に比べ子育て支援にお金を拠出していないわけではなく、むしろ子育て支援に市の単費、一般財源が使われているということを感じている。

室蘭は、青山市長がe n トークをやるということで、子育て支援に手厚いまちだというアピールをしている。逆に、伊達も、室蘭と比較して競争するわけではないが、行政を中心に子育て支援に力が入っているというアピールをもう少しの方が良いのではないかと、非常に歯がゆく感じている。

また、保護者からは、昨今の家庭事情もあり、とにかく預かる時間を長くしてほしいという要望が多い。幼稚園として預かる時間を延ばすことは幾らでもできるかという点、保育所との関係があるので、延ばせないところがある。特に、長期休暇中の預かり保育は8時半からだが、看護師や学校の教員などタフな仕事をされている方からは、8時半だと朝礼に間に合わない、何とか8時にしてほしい、7時半にしてほしいと言われる。時間を延ばすことはできるが、伊達市内の企業がもう少し子育てに理解を示していただけるとありがたい。

例えば、朝礼の時間を、子育ての世帯は夏休みの間だけ10分遅らせる、もしくは、朝礼の時間の引き継ぎに参加しなくても書面で確認できるようにするなど、夏休み、冬休みの1カ月間ぐらいの間の出勤時間を柔軟にさせていただきだけで、この問題は解消できるのではないかと個人的には思っている。

また、例えば、「この企業は子育てに優しい企業で、子育てに係るいろいろな事情に配慮をしている」といったことを行政のホームページで公開すると、その企業のアピールにもなるのではないかと。

幼稚園としてまだまだ至らない部分があり、自助努力をしているつもりではあるが、ぜひとも民間企業も子育てにもう少し理解を深めていただきたい。

【市長】

子育てに関して、企業に向けた対策を早めると、行政の財政負担も増えるので、そのところは企業といかに折り合いをつけるかが重要になってくる。

また、子育ての話は、実際に子育てをしている職員と民間の皆さんが話し合いをしているいろいろ考えたほうが、問題提起がよくできるのではないかとと思う。

行政職員が、民間で実際に子育てをしている方と話し合いをする機会も必要と考えている。

私は、総合戦略を策定するときに、Uターン、Iターン、Jターンに、Xターンを加えた。Xターンというのは、バツイチになったら帰って来ようという意味を指す。シングルマザーという意味ではない。要するに、人生はバツイチになることがいっぱいある。例えば、大学に出て一流企業に勤めると3年で3割がやめるという。バツイチというのは悪いことではなく、むしろそれを社会経験として生かし、この地域社会でいかにやっていくかということが非常に重要になる。

ポイントは、Xターンで戻ってきた人が、社会にどうやってフィットしていくかである。まだ、その仕組みはうまくできていないので、まさしく総合的に、何かをやめたとしても伊達市では応援できるというまちを目指していきたい。

【住民】

私は犬を飼っているので、できれば伊達にドッグランをつくっていただきたい。

【市長】

かなり前に、ドッグランをやれば観光客が増えると言われたことがあり、合併したころに大滝にドッグランをつくったが、利用者は全然いなかった。つくるのはいいけれど、実際に利用する方はあまりいないという実態がある。

高速道路のサービスエリアにはあり、外からも入れると思う。

【住民】

高速道路のサービスエリアにも行くが、市内に犬を飼っている人が結構いる。今日も、カルチャーセンターに来たら5～6頭いた。みんなと遊ばせたいので、小さくてもいいのでつくっていただきたい。

【市長】

私が市長になった頃は、犬の散歩によるふんの話が言われた。私の自宅に電話が来て、犬のふんのごとで2時間怒られたこともある。そこで、犬のふんに対してポスターを作り、随分啓発してきた。最近は苦情も減ってきたが、ドッグランもそういう意味では必要になるかもしれない。今後、検討させていただきたい。